

IV—2

青年の意識調査に基づく大都市周辺地域のまちづくりにおける社会教育施策の評価

北海道大学大学院 環境科学研究科

岸 泰之

同上

正員 山村 悦夫

同上

正員 加賀屋誠一

1. はじめに

いま、大都市周辺地域（urban fringe area）について概観してみると、様々な問題をみることができる。その主なものは、大都市の拡大化にともなう周辺地域へのスプロール化の過程で発生する、コミュニティの分断や既住層と新来層との間の葛藤などの生活諸問題、つまり社会病理的問題である¹⁾。近年、この都市周辺部のコミュニティに関する社会学的研究は多角的におこなわれているが、地域コミュニティ内の分断や葛藤、またコミュニティ再編過程で生じる様々な生活機能障害を社会病理的現象として分析し、これを踏まえた地域計画に関する研究はまだ多くはない。

一方、急速な高齢化社会を迎えつつある我が国にとって、社会保障や社会福祉の諸施策を支援する役割を持つ、地域コミュニティ内のネットワークづくりは急務である。このネットワークづくりには、その地域社会の個性に見合った、広範かつ公的なサービスである社会教育事業が重要な役割をもつと期待されている。同時に、自然環境や社会諸施設を通して、家庭や学校以外の場で展開される諸教育、文化活動を促進する社会教育事業は、ハードウェアに主眼を置いていた地域計画、あるいはまちづくりに於て、地域住民のニーズに合致したソフトウェア的側面も兼ね合わせている。

そこで、都市周辺地域の郊外化、すなわち農村型コミュニティの都市化という社会変動の過程に於て、病理的現象とともにコミュニティ再編に向けての新しい要求が生じてくるが、その中で社会教育施策がどのような評価を受けているかを明らかにする必要がある。

2. 本研究の目的

本研究では、新来層と既住層の混在する都市周辺地

域として 160万都市である札幌市に隣接する石狩町を例に、都市周辺部に居住する青年の生活問題、つまり社会病理的現象の解明と、コミュニティ再編過程において派生する新しい生活ニーズの中で、地域計画的側面をもつ社会教育施策の可能性の評価を試みる。図1に研究手順を示している。

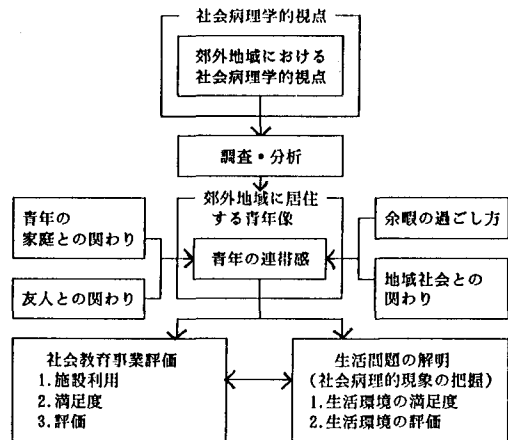


図1 研究の手順

本研究の特色として、青年の連帯感を社会に対するモラル（集団ないし組織の成員が、集団の成員であることに満足と誇りを持って結束し、集団の共通の目的に向かって積極的に努力しようとする態度）尺度の一指標として捉え、以て石狩町の青年の全体像だけでなく非新興地区（本町、八幡町、花畔（ばんなぐろ）、生振（おやふる）地区など）と新興地区（花川北、花川南地区）の青年像を描く上で中心的課題としていることである。以後、社会学の諸研究にならって、非新興地区の青年を既住層、新興地区を新来層と便宜上呼ぶことにする。また本研究では、社会教育施策の評

A Study on The Evaluation of Social Education Policy for The Youth in The Urban Fringe Area
- Based on The Consciousness Survey in The Youth, A Case of Ishikari-cho, in Hokkaido, Japan -
by Yasuyuki KISHI, Etsuo YAMAMURA, Seilchi KAGAYA

価を地域計画的側面からアプローチするために、特に文化活動、スポーツ活動などの社会教育活動が行なわれる諸施設に対する満足度、利用度に注目している。

なお、青年の連帯意識については、1980年に行なわれた「現代の青年—青少年の連帯感などに関する調査」（1981年、総理府青少年対策本部）を参考にしている。

3. 調査の概要

調査は、質問紙を用いた留置法によって、1989年9月11日～10月23日に行なわれた。対象者は、石狩町内に居住している満18～24歳（1989年4月1日時点）の男女3755人を母集団とし、1224人を住民台帳から無作為に抽出した。このうち有効なサンプル数は727票で、回収率は59.4%であった。その内訳を表1に示す。

表1 調査対象の内訳

DISTRICT	対象母集団			配票内訳			回収内訳		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
本町	106	110	216	32	32	64	14	20	34
	49.1%	50.9%	100%	50.0%	50.0%	100%	41.2%	58.8%	100%
生振村、八幡	138	130	268	40	16	86	29	24	53
	51.5%	48.5%	100%	46.5%	53.5%	100%	54.7%	45.3%	100%
花畔、樽川	181	159	340	41	37	78	24	28	52
	53.2%	46.8%	100%	52.6%	47.4%	100%	46.2%	53.8%	100%
花川北	658	679	1337	234	268	502	122	187	309
	49.2%	50.8%	100%	48.8%	53.4%	100%	39.5%	60.5%	100%
花川南	785	809	1594	262	232	494	135	144	279
	49.2%	50.8%	100%	53.1%	46.9%	100%	48.4%	51.6%	100%
合計	1888	1887	3755	609	615	1224	324	403	727
	49.7%	50.3%	100%	49.8%	50.2%	100%	44.6%	55.4%	100%
NATIVES	425	399	824	113	115	228	67	72	139
	51.7%	48.3%	100%	50.5%	49.5%	100%	48.2%	51.8%	100%
NEW COMERS	1443	1488	2931	496	500	996	257	331	588
	49.2%	50.8%	100%	49.6%	50.4%	100%	43.7%	56.3%	100%

この有効サンプル数は統計理論上信頼度95%、サンプル誤差±2%以内である。質問は、次のような12の大項目、40の中項目、152の小項目を設定した。

- (1)基本的属性（15問）
- (2)家族との関わり（16問）
- (3)友人との関わり（10問）
- (4)余暇活動（6問）
- (5)団体、サークルに関して（1問）
- (6)社会教育施設利用に関して（2問）
- (7)自動車所有に関して（1問）
- (8)個室の有無について（1問）
- (9)地域社会に関して（3問）
- (10)人生観、社会観（連帯感）、勤労観など（5問）
- (11)生活環境について（2問）
- (12)生活の満足度に関して（1問）

4. 連帯感スケールの作成

連帯感スケールは、社会観のうち青年の連帯感を捉える上で必要と思われる側面、例えば、（地域）社会に対する奉仕、人間関係に於ける信頼感や協同意識、友人観などについて訊ねた質問から成り立っている。つまり、家族、身近な友人、また地域社会との社会関係に対して、青年がポジティブな態度を示すか、あるいはネガティブな態度を示すかということに注視している。そして、この各問の回答カテゴリーにその意味に応じてあらかじめ数値を与え、個人が回答したカテゴリーの数値の合計をその個人の連帯感スケールにおける得点（連帯感得点）とする（表2）。つまり、この得点が高いほど連帯感が強く、低いほど弱いことを示す²⁾。石狩町の青年727人の「連帯感」の強弱の分

布をよくみるために、個人得点である連帯感得点の全範囲を5段階に分け（表3）、この5つのグループの内訳についてさらに性別、年齢別、地区別でみたものが表4である。この結果から、青年女子の分布に地区別の差があまりないものの、青年男子では多少の差異を認めることができる。新来層の男子では、均整のとれた正規分布であるのに対して、既住層では中位のグループに集中する傾向を示している。また、新来層の青年が年齢に関係なく、上位2グループにもほどよく分布しているのに対して、既住層のうち特に18～19歳の青年が最上位のグループAに誰も属していない点も、今後の石狩町全体のまちづくりや均衡発展を考察する上で、留意したい点である。

表2 質問項目と
連帯感スケ
ール得点

	YES	NO	D.K
A 世の中は助け合いなのだから、自分の生活を少しぐらい犠牲にしても、社会奉仕に参加するつもりだ	1	-1	0
B 私は、他人というものは一見信用できそうでも、結局はあてにできないと思う	-1	1	0
C 私は、リーダーになって苦労するよりは、のんきに人に従っているほうが気楽でよい	-1	1	0
D 私は無力な存在だが、みんなで力を合わせれば、相当なことができると思う	1	-1	0
E 私は一人でいるより、他の人や仲間と一緒にいるほうが楽しい	1	-1	0
F 私は一人でいるほうが心が落ちつく	-1	1	0
G 私は友達つきあいを深めすぎて、あまり束縛されたくない	-1	1	0
H 私は世の中をよくするために生涯をささげてもよい	1	-1	0
I 困っている人を助けるのはよいが、自分の生活までも犠牲にするつもりはない	-1	1	0
J みんなと協力しても、結局は一部の人の利益になってしまい、正直者が損をすると思う	-1	1	0

表3 連帯感得点
によるグル
ープ分け

連帯感得点の範囲	GROUP	人数	%
10 ≥ Y ≥ 6	GROUP A	45	6.2
5 ≥ Y ≥ 3	GROUP B	155	21.3
2 ≥ Y ≥ 0	GROUP C	260	35.8
-1 ≥ Y ≥ -3	GROUP D	162	22.3
-4 ≥ Y ≥ -10	GROUP E	105	14.4
全体		727	100.0

表4 連帯感グループの地区別、性別、年齢別

GROUP	男		女		既住層		新来層		既住層		新来層		既住層		新来層	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
GROUP A	8.3	4.5	3.8	6.8	3.0	4.5	9.7	4.5	0.0	2.9	8.3	5.8	6.3	10.0		
GROUP B	20.7	21.8	17.3	22.3	18.4	19.4	21.8	22.7	20.8	14.5	19.4	24.9	22.0	20.0		
GROUP C	36.4	35.2	39.8	34.9	46.3	35.8	33.9	35.6	47.1	40.6	30.6	33.5	34.7	38.5		
GROUP D	21.6	22.8	23.0	22.1	20.9	26.9	21.8	22.4	11.8	29.0	22.2	24.9	22.9	18.2		
GROUP E	13.0	15.6	16.5	13.9	13.4	20.9	12.8	14.8	20.8	13.0	19.4	11.0	15.1	15.3		

5. 連帯感の背景要因と青年像

次に連帯感に寄与している背景要因について分析を試みるとともに、連帯感というモラル尺度を通して石狩町の青年像を描いてみたい。まず、本調査の項目群より青年の属性、家族関係、友人関係、余暇時間、自動車・個室の有無、地域に対する愛着、環境に対する満足度など連帯感に関係していると思われる34の項目を独立変数として、連帯感得点を従属変数として重回帰分析をおこなった。下に回帰式(1)と各種統計量(表5)を示す。この結果から特に気づいた点をいくつか指摘すると、次のことが挙げられる。

- (イ) 石狩町外から転入した人ほど連帯感が高い
- (ロ) 家族観では愛情より経済を重視する傾向がある
- (ハ) 相談できる友達の存在が連帯感に強く影響を及ぼしている
- (ニ) 個人所有の自動車があると連帯感が弱まる傾向がある

同様に、既住層についての背景要因をみたのが回帰式(2)、表6であり、新来層については回帰式(3)と表7である。これらについてみると、

$$(1) Y = -0.426X_1 + 0.297X_2 - 0.384X_3 + 0.376X_4 + 0.414X_5 - 0.941X_6 \\ + 0.403X_7 + 0.730X_8 + 0.133X_9 - 0.476X_{10} + 0.307X_{11} + 3.113$$

重相関係数：0.423

表5 統計量(石狩町の青年全体の連帯感背景要因)

変数	内容	回帰係数β	標準化回帰係数β	βの標準誤差	β'の標準誤差	偏相関係数	F値
X1	前居住地(石狩町)	-0.423	-0.084	0.187	0.037	-0.090	3.184
X2	兄弟数	0.297	0.074	0.154	0.038	0.076	3.194
X3	続柄	-0.384	-0.073	0.202	0.038	-0.075	5.857
X4	父の理解	0.376	0.092	0.196	0.048	0.075	33.746
X5	母の理解	0.414	0.095	0.250	0.048	0.078	3.381
X6	家族観(愛情優先)	-0.941	-0.129	0.268	0.037	-0.137	18.321
X7	老親の扶養観	0.403	0.087	0.177	0.038	0.089	6.528
X8	相談できる友人数	0.730	0.200	0.133	0.036	0.212	37.811
X9	人間関係の満足度	0.133	0.100	0.050	0.038	0.104	11.686
X10	自動車の個人所有	-0.476	-0.069	0.250	0.038	-0.075	3.641
X11	石狩町への好感度	0.307	0.064	0.180	0.038	0.067	3.269

- (*) 既住層では、諸処の社会関係の中で全般に家族との関わりが連帯感に寄与している
- (ハ) 既住層では、老親に対する扶養意識が強い
- (ト) 新来層では、特に家庭のあり方について愛情より、経済的なものを重視する傾向がある
- (フ) 新来層では、特に相談のできる友人の存在が強く連帯感に寄与している

ということがわかった。なおこの3つの回帰式は、いずれも0.40前後の中位の重相関係数を持ち、また先の34の項目から回帰係数検定を通じて危険率10%以内のものを選出し、その上で再度分析して得られた独立変数によって構成されており、ここで導出された結果が全体としておおよそ有意であると言える。

$$(2) \quad Y = 0.507X_2 + 0.955X_5 + 0.871X_7 + 2.953$$

この時点でスプロール化による周辺地域のコミュニティの推移、すなわち解体・再編過程を一概に測ることはできないが、連帯感という社会に対するモラル尺度を通した青年像をみると、やはり既住層と新来層との間にかなりの隔たりがあることが認められる。これを周辺地域における社会病理的現象の1つとみなすこともできるが、具体的な生活場面に於て青年がどのような生活問題を抱えているか、そして生活ニーズを持っているか、また既住層と新来層に間にどのような差異があるかを検討してみる必要がある。

重相関係数：0.385

表6 統計量（既住層の青年の連帯感背景要因）

変数	内容	回帰係数 β	標準化回帰係数 β'	β の標準誤差	β' の標準誤差	偏相関係数	F値
X2	兄弟数	0.507	0.146	0.299	0.880	0.156	2.879
X5	母の理解	0.955	0.261	0.324	0.088	0.265	11.538
X7	老親の扶養観	0.871	0.202	0.381	0.088	0.197	4.944

$$(3) \quad Y = -0.653X_1 + 0.373X_2 + 0.456X_4 + 0.410X_5 - 1.212X_6 + 0.839X_8 + 0.165X_9 - 0.623X_{10} + 3.169$$

表7 統計量（新来層の青年の連帯感背景要因） 重相関係数：0.419

変数	内容	回帰係数 β	標準化回帰係数 β'	β の標準誤差	β' の標準誤差	偏相関係数	F値
X1	前居住地(石狩町)	-0.653	-0.114	0.230	0.040	-0.123	5.974
X2	兄弟数	0.373	0.088	0.170	0.040	0.095	4.086
X4	父の理解	0.456	0.112	0.213	0.052	0.093	23.438
X5	母の理解	0.410	0.090	0.238	0.052	0.075	2.977
X6	家族観(愛情優先)	-1.212	-0.162	0.299	0.040	-0.174	17.766
X8	相談できる友人数	0.839	0.223	0.151	0.040	0.235	35.942
X9	人間関係の満足度	0.165	0.119	0.058	0.041	0.124	10.012
X10	自動車の個人所有	-0.623	-0.088	0.283	0.040	-0.096	4.542

6. 生活問題の解明と社会教育施設の評価

青年の生活問題、あるいは生活ニーズを調べるために10項目からなる生活環境に対する満足度（表8）と同じ項目に対する整備の重要性（表9）を訊ねた。これらは「とても満足（重要）」から「とても不満（重要ではない）」の5段階に評価され、それぞれ「+2、+1、0、-1、-2」の得点が与えられ、その平均点によって序列化したものである。この結果を概観すると次の点を指摘できると思う。

- (7) 自然環境に対する満足度は良好ではあるが、一層の環境保全を望んでいる
- (イ) 既住層の生活環境に対する不満は相当に高く、中でも通勤・通学の便、下水道整備、公共交通に対する不満は非常に高い。なお、この3点について

は既住層、新来層を問わず整備を早急に望んでいる。これは大都市周辺、郊外地域にみられる社会病理的現象であり、石狩町にとっても以前からの重要課題となっている

- (ロ) 全体として上記の3点のほか、非行・犯罪防止対策、水害対策などのいわゆるインフラストラクチャーに対する整備が強く望まれている。一方、要望としては高い地位を得ていないが、スポーツ施設・文化施設に対する青年の関心は強く、自由回答欄では交通の便に次いで大規模な図書館、総合体育館、美術館が町の顔として要望されている
- (1) この結果をみるかぎり、まちづくりの上で従来のままのイベントに依存しても、青年の関心を引き起こすには至らないようである

表8 生活環境に対する満足度

全体		既住層		新来層	
自然環境	0.292	自然環境	0.319	自然環境	0.286
公園	0.131	水害対策	-0.230	公園	0.230
水害対策	0.070	非行対策	-0.268	水害対策	0.142
非行対策	-0.259	公園	-0.288	非行対策	-0.257
イベント	-0.342	イベント	-0.453	スポーツ施設	-0.307
スポーツ施設	-0.376	スポーツ施設	-0.672	イベント	-0.315
下水道	-0.482	文化施設	-0.856	下水道	-0.350
交通	-0.611	便	-1.036	交通	-0.506
便	-0.637	下水道	-1.044	便	-0.543
文化施設	-0.656	交通	-1.058	文化施設	-0.609

表9 生活環境に対する整備の重要度

全体		既住層		新来層	
便	1.544	交通	1.420	便	1.574
交通	1.536	便	1.413	交通	1.563
下水道	1.103	下水道	1.129	下水道	1.097
自然環境	1.003	自然環境	0.849	自然環境	1.039
非行対策	0.888	水害対策	0.683	非行対策	0.947
水害対策	0.769	非行対策	0.640	公園	0.811
公園	0.761	文化施設	0.626	水害対策	0.790
スポーツ施設	0.692	スポーツ施設	0.619	スポーツ施設	0.710
文化施設	0.690	公園	0.554	文化施設	0.705
イベント	0.473	イベント	0.460	イベント	0.476

次に社会教育関連の諸施設について利用度と今後の利用意志もみたい。先の生活環境に対する満足度と整備の重要性と同様、「よく利用した（利用したい）」から「利用しなかった（利用しない）」までの3段階にそれぞれ「+2、+1、0」の得点を与え、その平均点によって序列化をする。それぞれの結果は表10と表12に示すが、特に注目したいのは表11に示す「施設を利用しなかった理由」（単純集計、但し「利用しなかった」人全体を100とし、それぞれの理由項目に該当する割合を示している）である。「機会がない」という

回答の背景には、75.6%の青年の勤務地・学校が札幌市など石狩町外にあり、通勤・通学にも多くの時間を要することが主として考えられる。しかし、次いで「関心がない」「知らなかった」という項目を挙げる割合が高いこと、また自由回答の中で「社会教育関連の広報が不徹底」という点を挙げる人が多かったことを合わせて考察すると、青年の関心を喚起するような社会教育の広報が、そのあり方とともに未だ不十分ということが推察できる。

全体		既住層		新来層	
プール	0.571	プール	0.676	プール	0.546
公民館	0.336	公民館	0.468	テニスコート	0.304
青少年センター	0.297	青少年センター	0.396	公民館	0.304
テニスコート	0.278	野球場	0.317	青少年センター	0.274
開放体育館	0.232	地区集合場	0.288	開放体育館	0.224
野球場	0.216	開放体育館	0.266	野球場	0.192
開放運動場	0.149	開放運動場	0.209	開放運動場	0.134
地区集合場	0.142	テニスコート	0.165	地区集合場	0.107

	設備	手続き	機会	交通の便	知らない	関心ない	他
プール	7.2%	1.0%	39.1%	4.8%	9.4%	32.4%	5.6%
公民館	1.5%	0.3%	44.6%	1.5%	12.0%	35.3%	4.3%
青少年センター	0.9%	0.3%	44.5%	3.7%	12.1%	33.5%	4.5%
テニスコート	0.1%	6.0%	46.9%	0.6%	12.3%	27.9%	6.8%
開放体育館	0.8%	2.2%	45.0%	0.3%	12.6%	33.8%	4.9%
野球場	0.3%	1.0%	46.1%	0.8%	6.4%	38.9%	6.2%
開放運動場	0.3%	1.7%	44.8%	0.1%	13.9%	33.6%	6.2%
地区集合場	0.4%	0.6%	42.9%	0.1%	15.9%	33.9%	5.7%

全体		既住層		新来層	
テニスコート	0.897	テニスコート	0.930	テニスコート	0.890
プール	0.571	開放体育館	0.512	プール	0.585
開放体育館	0.452	プール	0.510	開放体育館	0.439
野球場	0.394	公民館	0.493	野球場	0.386
開放運動場	0.352	開放運動場	0.444	開放運動場	0.340
青少年センター	0.335	野球場	0.427	青少年センター	0.319
公民館	0.326	青少年センター	0.402	公民館	0.290
地区集合場	0.170	地区集合場	0.361	地区集合場	0.129

最後に、連帯感、社会教育施設の利用度、社会教育関連施設に対する満足度、一般社会施設に対する満足度、石狩町に対する好感度、生活の満足度について全体像をみるためにパス解析を行なったので、図2にそれを示す。ここから、一般社会施設（公共交通機関、通勤・通学・買物の便、下水道整備、水害対策、防犯対策、自然環境・景観の維持）と社会教育関連施設（公園、スポーツ施設、文化施設（コミュニティセンターや図書館など）、イベント）との間に非常に密接な関係があることがわかる。一方、低位な相関関係ながら居住年数が短い、つまり石狩町外から転入してきた人ほど、社会教育施設を利用していることに気づく。つまり、新来層の人々がプール、テニスコート、公民館や開放体育館といった社会教育施設を利用することで、石狩町というコミュニティに関わりながら、同時に石狩町に関心をもっていることが推察できる。

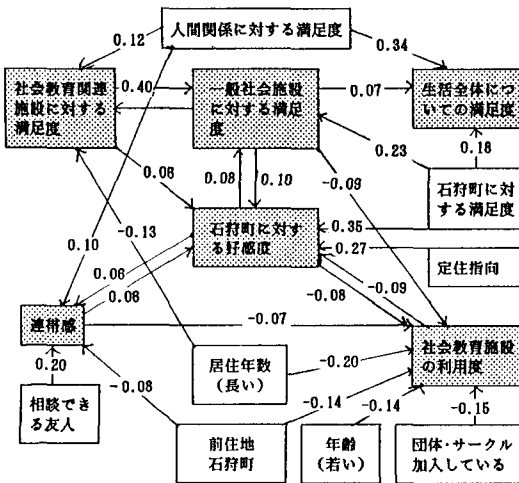


図2 石狩町の青年像についてのパス解析

7. まとめ

本研究を通して、下記の3項目が明らかになった。

- (1) 新来層と既住層のそれぞれの青年像や、生活ニーズをみると、やはり大きな差異を認めることができた。この中で、新来層の青年の連帯感得点が既住層のそれと比べて高い結果を示した背景には、より快適な住環境あるいは恵まれた自然環境を求めて石狩町に転入したことで、石狩町に対してポジティブな態度を有していることが考えられる。

(2) 周辺地区の病理的現象の主なものは、新興地区と非新興地区との間における、交通の便、下水道の整備などの生活環境の質的差異である³⁾。既住層の青年の生活環境に対する不満の高さは、これを裏付けている。そして、この基本的な生活環境の整備、改善があってこそ、青年の生活がより充実するとともに、また地域コミュニティや様々な文化活動に対しての関心、あるいは青年の石狩町に対する魅力が増すと予測できる。

(3) その中で、当面の石狩町における社会教育施策では、文化施設やスポーツ施設の改善整備あるいは拡充を図る一方で、より多くの青年が利用できるように施設案内、利用法などの広報活動の充実が重視されるだろう。少なくとも新来層にとって社会教育施設は、石狩町に関わるための重要な役割をも併せ持っているので、青年の関心を喚起するような広報を工夫したい。

以上、石狩町の次世代を担う青年について、連帯感を機軸に社会病理的現象の解明と社会教育施策の評価を試みた。新港地区の企業進出が進展する中で、今後既住層と新来層との間でコミュニティの解体・再編が活発になると思われる。その中で、まちづくりに於いても、社会教育施策に於いても困難な局面をむかえることが容易に予測できる。そこで、生活者のニーズを適確にとらえ、諸処の施策にそれを反映させる上で、コミュニティに対する帰属意識の動向についても継続的な研究が必要となる。本研究がその一指標となれば幸いである。

【参考文献】

- 1) 大橋 薫, 那須宗一, 岩井弘融, 大藪寿一, 「都市病理講座—第3巻—(都市地域の病理)」誠信書房 1980
- 2) 総理府青少年対策室, 「現代の青少年 —青少年の連帯感などに関する調査— 報告書」, 大蔵省印刷局, 1981
- 3) 大橋 薫, 前掲書